

2022. 4. 28

以下、わたしごとながら

森絃一

きょうは貴重なお時間をいただきありがとうございます。

あまりにも地元を知らなすぎるという反省から入会しましたが、港北ボランティアガイドが発足して10年、本当にあつという間の10年でした。

港北区の歴史や文化を学ぶことで地元を知り、地元を見直すきっかけをつかむことができました。さらにコースを立案し、その地区をガイドすることは大変楽しいものでした。皆さんも同じような感想をお持ちだと思いますが、徐々に地元への愛着は深まり、まさに「わがまち港北」が実感できるようになりました。

一番の思い出は今から9年前（2013）、企画講座で石彫作家佐藤賢太郎さん（*1）の講演会『『創造に生きる』～ギリシャとの絆・人、自然との共生～』を大倉山記念館で実現できたことです。



（*1）佐藤賢太郎さんは NPO 法人コスモ夢舞台の主宰者（わたしも所属しています）。2006年EU・ジャパンフェスト日本委員会の推薦を受けて、ギリシャの石彫シンポジウムに単身参加、「ゴルゴーナ（融合）」という人魚像を聖都オリンピックに近いアマリアーダに制作設置しました。

この像は、はるか東方から大海原を渡って辿り着いた縄文の人魚だそうです。東西文化の融合を謳った大倉精神文化研究所の大倉邦彦さんの理念に通じるものを感じます。

（当時の手づくりチラシ）

当時の横浜市大倉山記念館は東急東横線への乗り入れが決まった直後の相鉄（株）が指定管理会社で、館長の小池さんは相鉄ご出身。記念館の創建80周年記念特別講演としてご協力をいただきました。こうしたギリシャつながりで、地元エルム通り商店街の会長さんや日本ギリシャ協会の事務局長に出会うこともできました。講演会後にエルム通りの地中海料理店で開いた合同親睦会は、今でも都市との交流の楽しい思い出となっています。

佐藤賢太郎さんの郷里、新潟県下越の阿賀町豊実は、少子高齢化の進む典型的な過疎の集落です。都市との交流で地域の活性化と個人の元気を取り戻そうという NPO 法人コスモ夢舞台にとって、港北ボランティアガイドとのコラボは都

市との交流そのもので、その後の活動の大きな自信につながりました。

稲刈りの済んだ田んぼに作品を並べる「里山アート展」は、今年で19回目となり、昨年からはストーンサークルづくり、今年からは縄文の竪穴式住居づくり(*2)が新たに加わります。

(*2) 豊実周辺で縄文遺跡が発掘されたことを契機に、シンポジウムやフォーラムを通じて土器や土偶だけでなく縄文人の暮らしや生き方に関心が移ってきました。「里山アート展」の会場近くに竪穴式住居をシンボルとする「縄文の体験広場」をつくり、アートによる縄文村を建設する。“豊かな魅力ある田舎づくり”をめざすNPO法人コスモ夢舞台にとって、今風にいえば、これがSDGs(エス・ディー・ジーズ;持続可能な開発目標)ということになります。コロナが終息すれば、諸外国の若者も集まり、国際縄文村となることも予想されます。

そんな訳でわたしも、これからの事業活動にのめり込まざるを得ない状況にあります。横浜から豊実は約350km。クルマで片道約4時間、上越新幹線と磐越西線で約5時間半の道のりです。後期高齢者のわたしには遠距離通勤はかなりの重労働となりますが、仲間のひとりとして何とか参加するつもりです。

しかし、このまま二足の草鞋を履いて港北ボランティアガイドの活動を続けることは、結果として皆さんにご迷惑をかけることになることは明らかです。そこでやむなく優先順位をつけさせていただき、港北ボランティアガイドは退会させていただこうということになった次第です。どうか、ご容認をお願いします。



そして近い将来、コラボ企画第2弾を、縄文をテーマとして組むようなことになれば面白いなと考えています。どうぞこれからも、よろしくお願ひいたします。

長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

(その後、こんな卒業証書をいただきました)